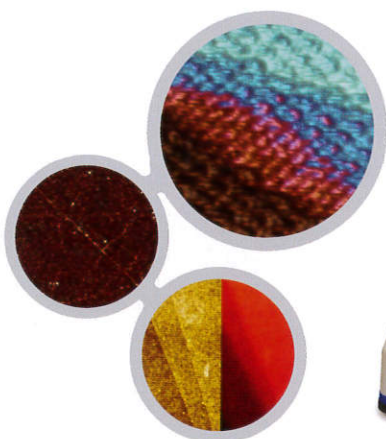


月刊 トライボロジー

THE TRIBOLOGY

2016 **1** No.341

nano tech 2016
ブース：東4ホール4E-15



特集

表面改質技術
ナノインプリント技術

世界最速・高分解能AFM Dimension[®] FastScan[™]とAFMの様々な測定事例
ブルカー・エイエックスエス

いつも“知りたがり”の 自分がある

(大阪府八尾市)

㈱トクピ製作所
営業部 営業一課

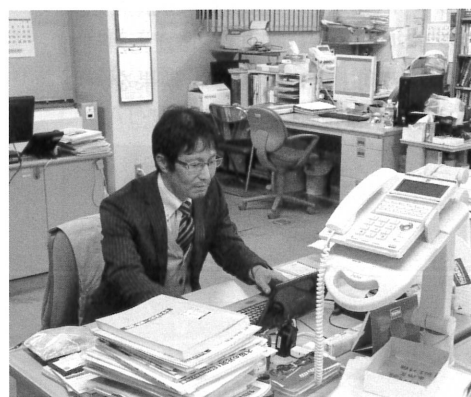
関本 昌利 (50歳)



関本昌利さんは、神戸市灘区に生まれた。小さい頃から工作好きで、バイクや車に傾倒した。そのため、高校卒業後は、整備士になろうと考えていたが、親の“大学には行った方がいい”という勧めに従って、視野を広げる目的で大阪経済大学の経済学部に進学した。

関本さんは入学後、「アルバイトをして念願のバイク生活をするつもりが、武道系の部活の新入生勧誘から助けてくれた写真部に、勧誘逃れて仮入部してしまった」と語る。

写真の趣味を持たない関本さんは、当初はすぐ辞めるつもりでいたが、“知らない分野ということもあり少し教えてもらおう”と考えを切り替えた。そうして商業写真撮影のアルバイトをし、部活では白黒写真を現像するなど、「写真専門学校のような生活」を送った。「人とその場の空気感」を切り取ったような写真を撮るのが好きだったことが、「見ず知らずの人との会話や折衝をあまり苦手としなくなった理由かもしれない」という。



営業は事前の準備が勝負



工場では、大量のポンプが出荷の時を待つ

◎ 仕事は「面白いと思える」かどうか

1988年、大学を卒業した関本さんは、「なんだか面白そう」という理由から、洋服のマーキング用資材・機材を製造する企業に入社した。営業職に配属されたものの、接客だけでなく、機械装置の整備、販売促進などの多岐に亘る業務に関わった。加えて、当時まだ普及していなかったパソコンを使った作業にも携わった。

入社して7年が経ち、仕事がいよいよ身についた1995年1月、阪神・淡路大震災が関西地域を襲った。震災を体験した関本さんは、「私の周りでも震災で色々なものが失われていきました。その時の強い喪失感の中で、“自分には何が残るんだろう。何か技術を身に付けていかなければ”との切迫した思いから、転職を決意した。

その後、知り合いの伝手で、前職とは毛色の全く異なる測量事務所に、「面白いと思えば技術は身につくはず」と考え、入社した。「でもこの仕事は、やってみたら、“キツイ”の一言でした」。暑くても寒くても、測量は野外作業のため、雨が降ったら自分よりも機材を濡らさないようにし、会社に持ち帰って、CADで図面作成をした。その図面を客先に持って行くことで、土地境界や建築物の設計の基準となる。「これが面白いと思えないと、続きませんね」。

しかし、順調にいったこの仕事も次第に減っていき、ま

これまで関わってきた装置に愛着が湧く



現場での加工の知識も武器になる

たもや転職を余儀なくされた。そんなとき、知人だったトクピ製作所の現社長、森谷主税氏に「我が社に来ないか」と声を掛けられた。

◎ いつまでも好奇心は尽きない

トクピ製作所は、高圧ポンプを基盤技術とし、金属加工向けの高圧クーラント装置などを展開する企業だ。関本さんは当時46歳だったが、「よくわからないが、新しいことに挑戦できそうだな」と、またまた旺盛な好奇心を持って同社に入社した。

営業として入社したのだが、同社の営業は関本さんが初めてだった。何をやるかは、自分で決めなければならない。まずは、顧客に高圧クーラントを知ってもらう必要があると考えた。

顧客は金属加工のプロがほとんどで、素人が説明しても説得力がない。「現場を知らない私が、現場に役立つものを提案することは大変でした」。知識を身に付ける必要に迫られた。「金属加工とは何か」、「切削とは」、「工作機械とは」……



トライボロジー会議や講演もこなせるように

などを片っ端から勉強した。高圧クーラントの文献資料はあまり世に出ていなかったため、関連する海外の論文なども集めて回った。関本さんはそうして知識を蓄えた上で、顧客のもとに赴いた。

「会いに行って様々な話をし、“変な奴だな”と思われたら、まずは第一歩です。そこから、顧客の質問などに対し、次回訪問するときには、しっかりと答えを用意していくのが大事です。こうすることで、“変な奴”から、“信頼できる奴”と思ってもらえます」。

関本さんは、学生時代と様々な仕事で積み重ねてきたコミュニケーション能力、営業力、知識など、すべてを武器として、仕事に取り組んでいる。今は、営業部門の後輩も増えて思うことがある。「自由度の高い会社なので、自分なりのやり方を見つけて欲しい。みんなこれまで、何かしらを経験してきたはず。これまでの自分の経験をいかに今の仕事に活用できるかですね。あとは、面白いと思って仕事をやることです」と言った。関本さん達の努力の結果、高圧クーラントの認知度は高まってきている。「高圧クーラントは、始まったばかり。これからが評価の段階です。手を緩めず普及を進めていきます」。ますます、関本さんのやる気は漲っているようだ。

関本 昌利氏

1965年5月、神戸市灘区生まれ。1988年に大阪経済大学経済学部を卒業後、繊維関連器具メーカー、測量事務所を経て、トクピ製作所に入社。趣味はラジオで海外放送を聞くことや電子工作など。

